

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成26年9月24日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 齊 藤 茜

助成の種類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	第5回国際ダルマキールティ学会 (The 5th International Dharmakīrti Conference)		
発表題目	Maṇḍanamiśra's Arguments against Dharmakīrti's Ideas on Language: Different Definitions of the Convention		
開催場所	ハイデルベルク (Crowne Plaza hotel, Heidelberg)		
渡航期間	平成 26 年 8 月 24 日 ~ 平成 26 年 9 月 1 日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(発表レジュメ)		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000 円	
	使用した助成金額	250,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	大阪⇄フランクフルト間の航空券(¥160,000)	
		フランクフルト⇄ハイデルベルク間交通費(¥5,000)	
京都⇄大阪間交通費(¥5,000)			
学会参加費・滞在費(¥80,000)			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 旅費の範囲で助成金を自由に使うことができたのがありがたかったです。海外出張が重なると自費での渡航が大変厳しくなるので、そのような中このように多くの人に海外に行きやすくする機会を与えてくださる機関の存在は貴重です。ありがとうございました。		

成果の概要 齊藤茜

報告者は2014年8月24日～31日、ドイツはハイデルベルクで開催された第五回ダルマキールティ国際学会に参加し発表及び討論を行った。国際ダルマキールティ学会は、インドにおいて七世紀に活躍したとされる仏教経量部の哲人ダルマキールティ（法称）の研究者が一堂に会する学会である。ディグナーガ（陳那）の哲学を、ミーマーンサー学派クマーリラからの批判に応える形で新たな哲学として昇華したダルマキールティは、特にアポーハ論と呼ばれる認識論においてインド哲学に甚大な影響を与えた。仏教徒は仏陀以来の「無常観」を基に、否定の哲学を発展させた。アポーハ論はその極点であり、全ての認識が「他者の否定」によって成り立っていると考える思想である。ある対象Aを「見」て（直接知覚して）「これはAである」と理解することは、その一瞬の間にA以外のものが「Bではない、Cでもない…」と否定されて、最後にAだけが残った結果である。アポーハ理論はダルマキールティとその後継者たちによって厳密に考察され整備され、それだけでひとつの大きな思想として完成された。このような仏教認識論は、インド諸哲学の中でも極めて難解とされながらも、それ故かこれまでヨーロッパと日本を中心として数多くの研究がなされてきた。ダルマキールティを専門とする研究者は百を超え、専門の学会が開かれるまでになった。ダルマキールティ学会の中心となるのは龍谷大学の桂紹隆教授及びウィーンアカデミーのシュタインケルナー教授であり、開催は約七年ごとで前回はウィーン、前々回は広島で行われた。報告者は、ダルマキールティやその学徒ではなく、同時代を生きたクマーリラや一世紀後のマンダナミシュラによるダルマキールティ批判に焦点を当てており、未だ実態が不明の当時の哲学論争に対して新たな解釈の可能性を示すものである。非仏教側からの研究は数少なく、厳密な議論を展開しブラフマニズムの権化とも言えるマンダナが、ダルマキールティをどのように理解していたかを解明することは、仏教と非仏教の対話を知る上で非常に重要な意味を持つ。

8世紀の哲学者マンダナミシュラは、インド文法学派の伝統に則り言語理解について語った著書『スポータの論証』中において、ダルマキールティの言語論を批判する。諸存在の刹那滅を信条とするダルマキールティは、話者と聞き手の意識の因果関係が生み出す音素の並びによって、語の認識が起こると考えた。「牛」という言葉の理解においては、「う」と「し」という瞬間的な音素を知覚した後、心作用によって両者をひとつにまとめて、そうして単一の認識「牛」が生起する。つまり、瞬間的な音素の連続から意味理解が生じるためには、人の意識の作用が不可欠である。しかしマンダナは、話者と聞き手の意識の接続に疑問を呈し、「語AがBという意味を持つ」という共通認識を作る際の矛盾を指摘する。このマンダナの指摘は、言語に対する共通認識の捉え方が仏教徒と文法学派で異なるという事実を示唆している。報告者は、語の共通理解をもたらす「言語協約」(saṅketa)の概念が、両学派でどのように異なるのかを、両者の著書の該当部分を比較しながら明らかにすることを試みた。

マンダナの思想の中核をなすのは「知覚作用は肯定的な作用である」というものであり、その点で知覚を「他者の否定」と捉えるダルマキールティとは真逆の立場を採る。しかしそのような思想間の差異ではなく、言語協約の場面で問題になるのは、果たして言語協約とは何かという根本的な問いである。外界の対象を見て「これ（指示代名詞）はAである」（外界対象とその名称）と教えることと、「Aとはこういったもの（言葉による具体的な説明）である」（名称とその定義）と教えることを、マンダナの思想の基になった五世紀の文法学者バルトリハリは区別して考えていた。その「区別」が明記されることはないが、バルトリハリは言語協約の説明の際必ず後者の例を用いる。マンダナはダルマキールティが言語協約として採用する前者の例を、それだけでは「その言葉が何を意味するか」についての本質的な関係は取得できないと斥ける。つまり、その対象の名を知ることと、その名の定義を知るとは全く別物だと述べる。マンダナ含む文法学派にとって、言葉の本質は音素ではなく「文」ないしその下位レベルの「単語」である。単なる音素の羅列から、それを言葉と認識する過程を、彼らは厳密に議論する。そのために、ダルマキールティの言う言語協約が「語認識」の段階を飛ばしていることを指摘できたのである。

興味深いことに、バルトリハリの著作『文章単語論』への複注を著した者たちは、言語協約をダルマキールティが考えるのと同じように捉えている。中世に大きな力をふるった仏教認識論の影響力を知ることのできる好例であるが、恐らくそれに影響される形で、現代の研究者のほとんどが一仏教学者だけではなくインド哲学者も含めて一言語協約を仏教徒の定義で捉えている。報告者の発表は、仏教徒の言語協約が中世インド思想において普遍的なものではなかったと指摘するものであり、また仏教認識論以外の視点からその内実を探る、というアプローチを示すものであった。このような手法は過去に前例がなく、またマンダナの哲学は研究が殆どされていない分野であることから、会場からは大きな驚きを持って受け入れられ、ウィーン・ハイデルベルク・また日本各地の研究者から賛辞を受けた。またウィーンアカデミーの研究者から、来年度アテネで開催される国際学会への招待を受けるに至った。

発表内容は来年以降にウィーンから出版されるプロシーディングに収録される予定であり、またこれを基にして報告者の博士論文のマンダナとダルマキールティの論争部分が執筆される。この成果は貴財団の助成なくしては達成できなかったものであり、この発表によって欧米各地の研究者からマンダナ研究者として、大きな賛辞を持って認められたことは大きな収穫であった。

このような機会を与えてくださった財団に感謝いたします。ありがとうございました。